

上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書（特別研究・一般研究）

研究代表者 所属・職名 臨床・健康教育学系・教授

氏 名 宮 下 敏 恵

研究期間 平成27年度～平成28年度

研究費 1,200,000 円

研究プロジェクトの名称	自己評価システムを用いた教師のメンタルヘルス支援プログラムの効果検証
研究プロジェクトの概要	教師のメンタルヘルスは依然として深刻な状況であり、教師のメンタルヘルスが悪化することは、教師個々の健康問題に留まらず、学校全体の機能低下に繋がりがかねない。そこで、試作段階ではあるが、宮下・奥村・増井らは多忙な学校現場において実施できるような、web上でのチェックテストを用いた自己評価システムの作成を小中学校の教師を対象に行ってきた。回答項目を少なくすることができる項目反応理論にもとづくコンピュータ適応型テストを組み込んだシステムであり、学校現場に特化した項目のテストであり、前回の自己評価との比較も簡便にできるものである。本プロジェクトにおいては、高等学校での調査を行い、高等学校の教師もチェックできるようにシステムの精緻化を行うことを目的とした。さらには支援プログラムを継続的に実施し、介入効果を検証することも目的とした。
成 果 の 概 要	高等学校の教師において、チェックシステムを施行できるように、A県内57校(教師2,037名から回答)の高等学校での調査を行ったところ、小中学校と高等学校の教師ではバーンアウトの様相がかなり異なるという結果がみられた。以前に行ったA県内の小中学校(小学校44校、1,019名、中学校23校、660名)の結果と比較すると、小中学校では情緒的消耗感が高く、高等学校では脱人格化が高いという結果であった。先行研究においては脱人格化が高いということは、バーンアウトがかなり進行していることと言われているが、本研究の結果では、高等学校の教師において情緒的消耗感はそれほど高いわけではないが、脱人格化は高いという結果がみられた。高等学校教師は小中学校教師とは異なる結果が得られたため、今後さらに高等学校教師独自の傾向を検討する必要があるだろう。 またB県の特別支援学校1校において、実際に自己評価システムを2学期、3学期と2回チェックしてもらい、2学期末に結果のフィードバックを含む職員研修を行った。初等部、中等部の教職員19名にチェックをしてもらった結果、2学期に比べて3学期の方が上司からのサポートが良好になるという結果が得られた。このように実際に学校現場で継続的に実施をしたところ、上司からのサポートがあったと回答する人が増え、介入効果があったといえるだろう。
研究成果の発表状況	・「メンタルヘルスチェックシステムによるメンタルヘルス向上の試み」日本学校心理士会2016年度大会プログラム・発表論文集, 72. ・シンポジウム「教師の燃え尽きを防ぐ」2017年3月25日開催 会場：秋田大学